

「目を覚ましていなさい」

(マルコ13:33-37)

挽地茂男

2018.11.18 日本基督教団千歳丘教会

先週に引き続き、小黙示録からお話を致します。「世の終わり」についてのお話です。しかし正直なところ、わたしたちには「この世が終わる」という現実感がない



というのが本当のところ所ではないでしょうか。「終わり」

と言われても、わたしには関係のないことのように思える。それが実感なのです。

「この世が終わる」という現実感がなくても、「自分の人生がやがて終わる」「人生が限りある時間でできている」という実感を持つ人は、少なくないと思います。意外なことに、あのアクション俳優のブルース・リーがこんなことを言っています。「人生を愛するなら時間を無駄にするな。人生は時



間で出来ているんだ。」“If you love life, don't waste time, for time is what life is made up of.” またアポロ11号で月面着陸した宇宙飛行士のニール・アームストロングはこう語っています。「人間の心臓が一生の内にう

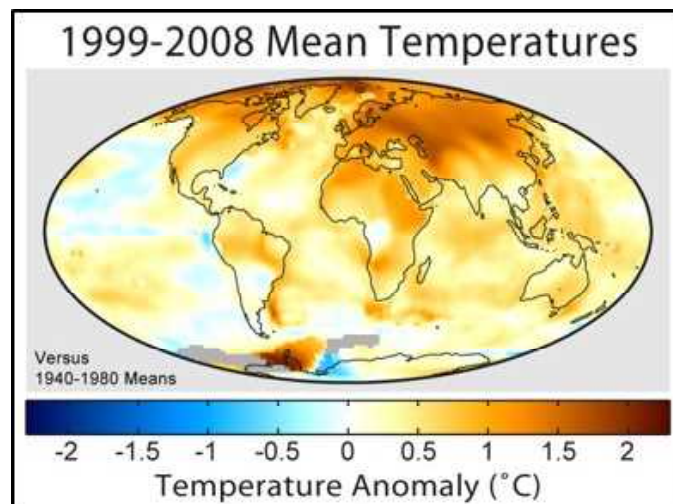


つ鼓動の数は、すべての人間にそれぞれ限りがあって、いつかそれぞれが止まる。だから僕は時間を無駄にしたくない。” “I believe every human has a finite number of heartbeats. I don't intend to waste any of mine.” いずれも「人生が限りある時間でできていて、それを大切に生きるべきだ」という実感に基づいた言葉です。

それに反して、世界に「終わりが来る」ということに現実感がないのは、わたしたちが死によって人間の一生が終わっていくのを現実に目で見るとするには、世界が終わるのを自分の目で見たことがないからです。また今までも、ノストラダムスの大予言のように、何度か終わりが叫ばれたけれども、実際には終わったためしがありませんでした。例えばかつて、エホ

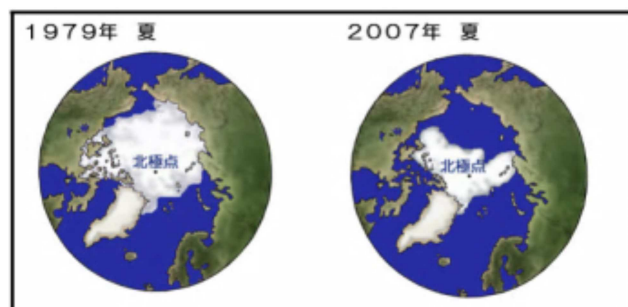
バの証人は1914年に終わりが来ると公言しましたが、結局は来ませんでした。次いで1925年に終わりが来る、と言い出したのですが、結局同じでした。さらに1975年に今度こそ世界の終わりが来る、と叫んだのですが、やはり現実のものとはなりませんでした。わたしたちには、安易に「世界の終わり」を口にする人たちを、にわかに信じるよりも、一旦、疑いの目をもって見るのがふつうになっているのです。「終わりが来る」ということが、宗教的妄想を生み出し、それが宗教勧誘のための脅しに使われることもよくあるからです。黙示録に出てくる「ハルマゲドン」(世界最終戦争)という言葉は、新宗教や新・新宗教では黙示録における文脈も意味も無視して、宗教勧誘のため使われることがよくあります。このような例に接すると、「世界の終わり」という発言から、距離を取りたくなるのも致し方ないことかもしれません。

しかし一方、現在、科学的な観点から、世界レベルの終末が、真剣に取り沙汰されています。それは、人間が創り出した「世界を終



わらせる」爆弾と呼ばれるものです。人類(地球)がかかえる爆弾と呼ばれるものが4つあります。

一つは、その危険性が叫ばれながら、一向に改善されない、よくご存知の①**地球温暖化**の問題です。過去400年間で一番地(球)表面の温度が高いと言われている。地表面の温度が高いために、海水膨張が起こり、さらに氷河が融解して〔※2015.11.5に南極の氷は増加しているというNASAの発表があるが、これは衛星による積雪地域の拡大の観測に基づいており、積雪により形成された氷床の氷の密度は推測されているに



過ぎない〕海面上昇がおこり、エルニーニョ現象にともなう猛暑や台風や豪雨などの異常気象が頻発し、生態系の変化が起こっています。ホッキョクグマやアザラシなど寒冷地に生息する動物が激減しています。その一方で、海水温の上昇に伴い、世界中でクラゲが大量発生し、日本に限っても、日本海でエチゼンクラゲが大量発生したり、また気温が高いために生息北限の上昇が見られます。例えば千葉県館山市沖ノ島。ここは東京湾の入り口にある島なのですが、近年、熱帯魚が楽しめる場所として人気が高まっている無人島です。そこでは、沖縄で見られる珊瑚やクマノミといった海洋生物が見られます。また、本来は西日本の代表的な蟬であったクマゼミが仙台で発見されております。

二つ目は②**人口爆発**です。現在の世界人口75億であります、増加率は1年に7000万人〔※世界の人口は、1分に137人、1日で20万人、1年で7千万人、増えています。世界中で、1年に6千万人が亡くなり、1億3千万人が産まれるので〕で、二年で一個、日本が誕生する計算になります。

す。三つ目が③**飢餓問題**です。飢餓問題は人口の爆発的增加にともななって、ますます深刻な問題になりつつあります。現在、



世界の食糧は、世界の4分の1の人口に集中しています。4人の人がいれば、1人が食べていて3人が指をくわえているという状態です。「**ハゲワシと少女**」という写真をご存知でしょうか。飢えて力つきた少女を、ハゲワシがねらっているというショッキングな写真です。撮影者はケビン・カーター。1994年のピューリッツアー賞〔※新聞等の印刷報道、文学、作曲に与えられる米国で最も権威ある賞である。コロンビア大学ジャーナリズム大学院が、同賞の運営を行っている〕を受賞しました。アフ



リカのスーダンという国で撮影されたものです。このスーダンから日本は、ソルガム〔スーダンの人々の主食〕という穀物を輸入しています。家畜の飼料にするためです。ところがソルガムは、現地の人にとっては貴重な主食なのです。このソルガムの輸入が始まったのが、写真と同じ1994年からだといいます。

しかし、飢餓状況が生まれるのは食糧が十分につくられていないからではないのです。それは、先進国と後進国の間にある経済格差に基づく、生産と配分の不均衡によって生み出されています。穀物は年間24億トン生産されており、これは世界中の人が生きていくのに必要な量のおよそ2倍の量にあたります。一方で日本は、年間5500万トンの食糧を輸入しながら、1800万トンも捨てているのも事実なのです。食糧の廃棄率では世界一の消費大国アメリカを上回っているのです。日本だけではなく、先進国の廃棄率は恐るべきものがあります。国連のWFP（World Food Programme）の統計に従えば、世界でおよそ、少なく見積もっても8億500万

人、9人に1人が、毎晩、何も食べずに（おなかをすかせたまま）眠りにについていることになります。そして四つ目の爆弾が、④核問題です。B61-11というアメリカ製の原子爆弾は、旧ソ連の地下司令部攻撃用のB53という9メガトン（広島約600倍）の核爆弾が古くなったので、それに代えるために開発されたものです。

核廃絶が叫ばれながら、核武装はさらに進んでいるのです。現在世界には、約2万基の核弾頭が配備されている、と言われています。これは実に、広島に投下された原子爆弾120万個分にあたります。



聖書は、世界がこのまま永遠に存続するとは教えません。必ず終わりが来る、と教えるのです。しかし聖書は、世界の終わりに向けて、切迫感にあおられて慌ただしく生きるのではなく、祈り深く、まず愛の奉仕に生きることを教え

ます。そして本日の聖書箇所のマ
ルコ福音書13章は、「世界の終末」
を前提とした生き方のもう一つの
大切なポイントを教えています。

世界の終末をテーマにした文学
を黙示文学と言いますが、黙示
録はその黙示文学の代表的な所産
です。本日のマルコ福音書13章が
「小黙示録」と呼ばれていることは
何度かお話しいたしました。ヨハネ
黙示録のように長編の黙示録ではな
いけれども、小型の黙示録だという
訳です。今日の箇所はその「小黙示
録」の一部です。小型ですけれども
黙示録ですから、当然、世の終わりの
こと、世界の終末が語られます。
今日の箇所は、世界の終末を語っ
た主イエスが、その「終末的説教」
を結ぶ、結びの部分にあたります。
ですから、主イエスの言葉は、「世
界の終末」を前提とした生き方、
終末を意識した生き方を指し示し
ます。その生き方の重要な側面を
本日の箇所は語っているのです。



まず13章全体に、簡単に見通し
をつけておきたいと思います。この
13章は、1節でイエスと弟子た
ちの一行が、神殿の境内を出て行
くときに、エルサレム神殿の壮麗
さに感嘆した弟子の一人の言葉か
ら始まります。「先生、御覧くだ
さい。なんとすばらしい石、なん
とすばらしい建物でしょう。」(v.
1)。それに対して主イエスがエル
サレム神殿の崩
壊を語ります。

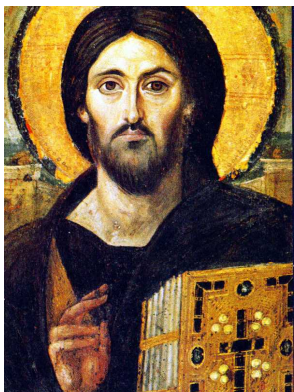


嘆きの壁

「これらの大き
な建物を見てい
るのか。一つの
石もここで崩されずに他の石の上
に残ることはない」と答えますと、
それに対して弟子たちが、「その
ことはいつ起こるのですか。また、
そのことがすべて実現するとき
には、どんな徴があるのですか」と
質問をなげかけます。その質問を
受けて、主イエスが終末について
予言をするという流れになってお
ります。

しかし本文をよく観察してまい
りますと、主イエスは世の終わりの
ことを語りながら、再三再四、
弟子たちに「気をつけていなさい」
と注意を呼びかけます。その注意

は、二つの内容にまとめることができます。一つは、偽キリストや偽預言者の偽りの教え、つまり邪説に「気をつけていなさい」と注意を促します。もう一つは、終わりの日が来るまでには必ず迫害と苦難が襲ってくるが、信仰を堅くもって、それに耐えるように「気をつけていなさい」と語っているのです。そのために「気をつけていなさい」という言葉、すなわちギリシア語の βλέπετε (ブレペテ) という〔英語のwatch にあたる〕言葉が連呼されます。13章の①



5節。「人に惑わされないように〈ブレペテ〉気をつけなさい。私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』(＝私がキリスト[メシア]だ Ἐγώ εἰμι) と言って多くの人を惑わすだろう……」。②さらに9節を見ますと、「あなたがたは自分のことに〈ブレペテ〉気をつけていなさい。あなたがたは地方法院(サンヘドリン)に引き渡され、会堂で打ちたたかれる……」。③さらに21－23節。「そのとき、『見

よ、ここにメシア(＝キリスト、原語 ὁ Χριστός) がいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。偽メシア(キリスト)や偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。だから、あなたがたは〈ブレペテ〉気をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。」そして四つ目の〈ブレペテ〉が今日の箇所④33節に出てきます。〈ブレペテ〉気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。「気をつけていなさい」にプラス「目を覚ましていなさい」が付加されて「気をつけて、目を覚ましていなさい」と注意を呼びかける警告・勧告の調子がより強くなっています。実際、この13章は黙示文学的な表現やイメージをたくさん使っていますが、むしろ非常に警告的性格あるいは勧告的性格が強い文書なのです。ある新約学者(C.H.ドッド)は、この部分を、黙示的用語を用いた主イエスによる「勧告的説教(hortatory address)」と呼んでいます。つまり黙示録のもつ終末

的な緊張感を背景にして、今生きている時がどんな時であるのかに「**気をつけて、目を覚ましていなさい**」と語りかけ、警告・勧告を発しているのです。

実はこの「小黙示録」は、黙示録に頻繁に出てくる戦争や、地震や、飢饉や、自然の異常現象や、天体の破壊といった黙示文学的・終末的なイメージを繰り返し語ります、がしかし、この「小黙示録」は、終末の時期やその前兆にこだわる黙示録の思想圏内には、もはや立っていないのです。この福音書を書いたマルコの視野の中には、当時にすでに進行中の「ユダヤ戦争」(66-70A.D.)が入っていると考えられます。つまりマルコは、戦争のうわさと終末の到来を直結させることによって生じる危険性に警告を発しているのです。それは③ 7 節です。13:7 戦争の



ユダヤ戦争の末期70A.D.,ローマ軍によるエルサレム破壊

騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ**世の終わりではない**。戦争の騒擾の中で、襲ってくる迫害と苦難によって忍耐が限界に近づくとともに、偽キリストや偽預言者(5-6, 21-23節)が信仰者にとってどれほど脅威になるかは、想像に難くありません。信仰者も偽りの教えに望みを託し、真に信すべき方を見失ってしまう可能性があるのです。マルコは、そのような終末的な緊迫感を背景にしながら、神の民に向かって、主イエスの言葉をなげかけるのです。「**気をつけて、目を覚ましていなさい。**」

それゆえ小黙示録の結びの3 3 節から3 4 - 3 6 節の「門番の譬え」を経て、終わりの3 7 節に至るこの箇所全体に、「目覚め」のテーマが強い調子で反復されます。

① 3 3 節「**気をつけて、目を覚ましていなさい**。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」続く「門番の譬え」の中で、② 3 4 節「それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、」門番には「**目を覚まして**

いるようにと、言いつけておくよ
うなものだ。」続けて35節「だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。」そして36節「主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない〔裏を返せば「目を覚ましている」ことを要求している〕。」
③ そして結びの37節で聞き手を拡大して「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

目覚め(覚醒)。「目を覚ましている」ことが重要なこととして語られていることは一目瞭然です。では何に目覚めているべきだと言っているのでしょうか。それは「時」と言葉で表されています。33節を繰り返し見ましょう。気をつけて(ブレペテ)、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。この「時」には特別な「時」を表す言葉、καίρós(カイロス)という言葉が使われています。この言葉によって表される「時」は、決定的な時、神の定めの時を意味

しています。その時がいつ来るか分からないのです。分からないとすれば、その「時」の到来は、目覚めて待つしかないのです。

そしてこの「時」のテーマを、現在の文脈から外に、受難物語の中に追いかけてみましょう。まず第一に、「門番の譬え」(v. 34-36)における「時」のテーマが、受難の出来事の時間経過の標識として使われていることが観察できます。「門番の譬」では、「時」のテーマはキリストの再臨と結びつけられていて、教会を象徴する門番は、こう命じられています。「だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰ってくるか、夕方か、夜中か、鶏の鳴く頃か、明け方か、わからないからである」(v. 35)。「門番の譬」ではキリストの再臨と結びついているこの「時」

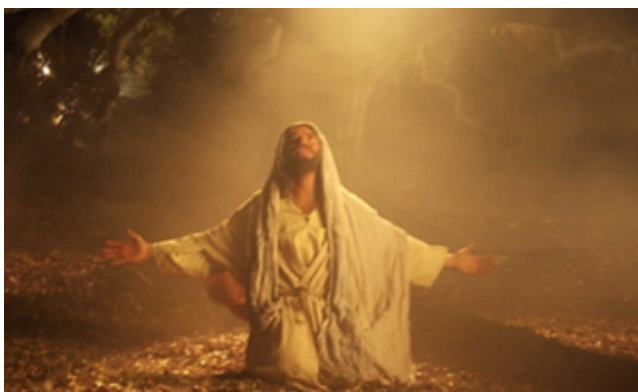


のテーマが、一方の受難物語では、イエスの受難の事件展開と密接に対応しています。「夕方、夜中、鶏の鳴く頃、明け方」という「時」の標識が、受難物語では以下のように使われます。「主イエスは、

夕方（14:17） 1 2 弟子と一緒に最後の晩餐にやって来ます。それに続くゲツセマネでの逮捕は**夜中**に起こります。一番弟子のペトロは**鶏の鳴く頃**（14:72）にイエスを知らないと否認します。そして、**夜が明ける**（15:1）と祭司長、長老、律法学者たちは、主イエスを縛って引き出し、ピラトに引き渡します。」主イエスの受難のドラマの時間経過・時間展開もまた、目覚めているべき「時」として意識されているのです。

第二に、「ゲツセマネの祈り」に、「時」のテーマを見出すことができます。[「ゲツセマネの祈り」と「門番の譬」は強い対応関係を示しています（後述）。] ゲツセマネの園で、主イエスは「時」を過ぎ去らせてくれるようにと祈っています。1 4 章 3 5 – 3 6 節。

「14:35 少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この



苦しみの **時**(ἡ ὥρα)が自分から過ぎ去るようにと祈り、14:36 こう言われた。『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』

さらに1 4 章 4 1 節。

「イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。**時**(ἡ ὥρα)が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。」ここで言われている「時」も主イエスの苦しみ、受難の時だということとは明らかです。

さらに、第三に、十字架に「渡されていく」主イエスの死のクライマックスへの高まりが「時」の**三重のパターン**で表現されます。

(1)15:25 イエスを十字架につけたのは、**第三の時**(ὥρα τρίτη 午前九時)であった。(2) 15:33 昼の**第六の時**(ὥρα ἕκτη 十二時)になると、全地は暗くなり、それが**第九の時**(ὥρα ἐνάτη 午後三時)まで続いた。そしてこの(3) 15:34 **第九の時**(ὥρα ἐνάτη)にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エ

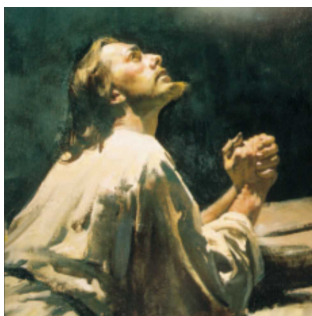
ロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。「時」は受難物語において、ゲツセマネの園での逮捕で始まり、十字架でその頂点を極める主イエスの「**受難**」の象徴となっています。



これに対して門番と譬（を含む13:33-37）では、「時」は人の子が「**再臨**」する時（13:29, 32, 33）の象徴となっています。つまり人の子の「**再臨**」と主イエスの「**受難**」という異なる内容が、「時」のテーマによって結ばれているのです。いずれも、決定的なその「時」に目覚めていることを求められています。この「時」に対する緊張、すなわち「目を覚ましていなさい」という命令によって要求される信仰的な目覚めが、両者を真の対応関係に置いているのです。主イエスが弟子たちに「**目を**

覚まして祈っていなさい」と命じる時に使う「**目を覚ましている**」（*γρηγορεῖν*, ゲオルゲイン）というマルコ福音書に二回しか出てこない動詞が、一箇所は、今見ていましたゲツセマネの祈り（14:34, 37, 38）に、もう一箇所が、門番の譬（13:34, 35, 37）に使われているのはそのためなのです。

さらに、門番の譬えとゲツセマネの場面には、言葉上の著しい対応が見られます（R.ペッシュ）。ここには主イエスが①「目を覚ましていなさい」と命じて、②戻てくると、（弟子や門番が）③眠っているのを、④発見するというテーマを表わすのにまったく同じ動詞が同じ語順で使われます。〔日本語では動詞と目的語が反対になることがよくあります。〕「目を覚ましていなさい」―「戻て来る」―「発見する」―「眠っている」という動詞の連鎖は、門番の譬え13章36節では、以下のようになります。僕達に仕事を割り当て、



門番に①「目を覚ましていなさい」と言いつけて旅に出た13:36
主人が突然帰っ

て②来て、あなたがたが④眠っているのを③見つけるかもしれない。(μὴ ἐλθὼν ἐξαίφνης εὕρη ὑμᾶς καθεύδοντας)

ゲツセマネの祈り、14章37節。主イエスは弟子たちに、①目を覚まして祈っているように命じて、自分自身は弟子たちから少し離れたところで祈って、37節。

14:37 それから、②戻って〔来て〕③御覧になると、弟子たちは④眠っていたので、(καὶ ἔρχεται καὶ εὕρισκει αὐτοὺς καθεύδοντας) ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。」

そして再度ゲツセマネでは、主イエスが、40節。

14:40 再び②戻って〔来て〕③御覧になると、弟子たちは④眠っていた。(καὶ πάλιν ἐλθὼν εὗρεν αὐτοὺς καθεύδοντας) ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。門番の譬えとゲツセマネの祈りには「目を覚ましていなさい」—「戻って来る」—「発見する」—「眠っている (watching-coming-finding-sleeping) という著しい対応が見られるのです。この〈目覚

め一眠り〉(watching-sleeping)のテーマが「門番の譬え」と「ゲツセマネの祈り」を理解する鍵です。

〈目覚め一眠り〉のテーマは、13章の門番の譬では、主イエスの再臨に関係づけて語られることによって、終末論的な重みを帯びています。そしてそれと並行するゲツセマネの祈りにおける弟子たちの行為の上にも、同様に、終末論的な光を投げかけているのです。

「時」に目覚めているということは終末論的な重みを持つ、つまり終末時の審きの要素が、今現在において現実性をおびるということです。審きとはもともと「別ける」(κρίνω)という言葉から出てくるのです。「白黒が別れる」「白黒がはっきりする」「違いが出てくる」ということです。主イエスは「気をつけていなさい」「目を覚ましていなさい」と弟子たちに警告を繰り返しました。「違いが出てくる」からです。「白黒がはっきりする」からです。「気をつけて、目を覚ましていなさい。」主イエスの言葉は、



緊迫した終末的状况を背景に、偽キリストの横行と苦難と迫害の中で、主イエスの受難を手本としつつ、終末に向かって、信仰的目覚めを持ち、現在がどのようなときであるかを見極めつつ生きることを求めているのです。

そして主イエスの警告は弟子たちを透過して、（わたしたちを含む）すべての人に向けられます。

37節。

13:37 あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

アドベントを前にして—アドベントとは来臨（来る）ということですが—わたしたちは目覚めて主の来臨に備えたいと思います。クリスマスという一度目のアドベント（来臨）を待ちお祝いする心は、二度目のアドベント（再臨）を待つ心と同じなのです。わたしたちのすべての希望は、この来るべき方にかかっているのです。終わりの時がいつなのかを知ることが大切なではありません。今を大切な時としてしっかりと目覚めていることが大切なのです。時に目覚めていなければなりません。時に流されてはならない

のです。しかしそれは、時間を無駄にしないようにあくせ



くと生きるという生き方ではありません。また何か特別な生き方をするということでもありません。一日一日、一時一時を大切に生きると言うことです。最後に**ペトロの手紙—4:7-11** を呼んで終わりましょう。

7万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。8何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。9 不平を言わずにもてなし合いなさい。10あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。11語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく

神にありますように、アーメン。
祈りましょう。

2018.11.18 日本基督教団千歳丘教会

